

2 麦 類

(1) 要 旨

ア 作付面積

平成22年産4麦（小麦、二条大麦、六条大麦及びはだか麦）の子実用作付面積は26万5,700haで、前年産に比べて500ha減少した。（表2-1、図2-1）

イ 収穫量

平成22年産4麦の子実用収穫量は73万2,100tで、前年産に比べて12万1,200t（14%）減少した。（表2-1、図2-1）

図2-1 4麦（子実用）の作付面積及び収穫量の推移（全国）

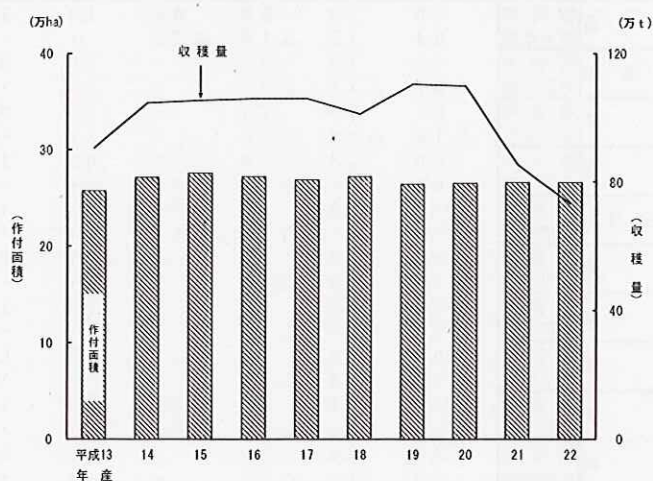


表2-1 平成22年産4麦（子実用）の作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積 百ha	10a 当たり 収 量 kg	収 穫 量 百t	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作付面積		10a 当 たり 収 量		収 穫 量		10a当たり 平均収量 対 比	10a当たり 平均収量
				対 差	対 比	対 比	対 比	対 差	対 比		
				百ha	%	%		百t	%	%	kg
全 国											
4 麦 計	2,657	...	7,321	△ 5	100	...	△ 1,212	86	...	...	...
小 麦	2,069	276	5,713	△ 14	99	85	△ 1,029	85	68	408	...
二条大麦	366	285	1,043	6	102	89	△ 115	90	81	354	...
六条大麦	174	257	448	△ 2	99	87	△ 74	86	84	307	...
はだか麦	47	250	118	4	109	97	6	105	81	309	...
北 海 道											
4 麦 計	1,184	...	3,550	0	100	...	△ 523	87	...	...	...
小 麦	1,163	300	3,494	0	100	87	△ 507	87	64	470	...
二条大麦	21	264	56	0	98	79	△ 16	78	75	353	...
都 府 県											
4 麦 計	1,473	...	3,771	△ 5	100	...	△ 687	85	...	...	...
小 麦	906	245	2,219	△ 14	98	82	△ 522	81	75	328	...
二条大麦	345	286	987	7	102	89	△ 99	91	81	354	...
六条大麦	174	257	448	△ 2	99	87	△ 74	86	84	307	...
はだか麦	47	250	118	4	109	97	6	105	81	309	...

注：1 「（参考）10a 当たり平均収量対比」とは、10a 当たり平均収量（過去7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値）に対する当年産の10a 当たり収量の比率である（以下の各統計表について同じ。）。

2 六条大麦及びはだか麦については、北海道には作付けが無い。

表 2-2 平成22年産 4 麦（子実用）の作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量（全国農業地域別）

全国農業地域	4 麦 計		小 麦				二 条 大 麦				六 条 大 麦				は だ か 麦			
	作 付 面 積	収 穫 量	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	作 付 面 積	10 a 当 たり 収 量	収 穫 量	(参考) 10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比
	百ha	百t	百ha	kg	百t	%	百ha	kg	百t	%	百ha	kg	百t	%	百ha	kg	百t	%
全 国	2,657	7,321	2,069	276	5,713	68	366	285	1,043	81	174	257	448	84	47	250	118	81
北 海 道	1,184	3,550	1,163	300	3,494	64	21	264	56	75	-	-	-	nc	-	-	-	nc
都 府 県	1,473	3,771	906	245	2,219	75	345	286	987	81	174	257	448	84	47	250	118	81
東 北	98	186	83	183	153	92	0	150	0	nc	14	227	33	79	-	-	-	nc
北 陸	97	255	x	155	x	94	0	150	0	106	95	265	252	87	-	-	-	nc
関東・東山	401	1,163	219	279	610	80	129	319	412	90	52	267	138	83	x	232	x	63
東 海	150	316	145	211	306	75	x	100	x	82	5	190	9	74	x	...	x	nc
近 畿	102	209	91	205	187	79	2	174	3	70	x	201	x	65	x	240	x	88
中 国	43	117	14	201	28	69	26	323	83	86	1	151	1	73	2	195	4	85
四 国	43	111	18	244	43	73	0	294	1	89	-	-	-	nc	25	272	68	83
九 州	539	1,415	334	266	889	68	188	260	488	73	-	-	-	nc	17	228	38	80
沖 縄	0	0	0	155	0	94	-	-	-	nc	-	-	-	nc	-	-	-	nc

(2) 解 説

ア 小麦（子実用）

(ア) 作付面積

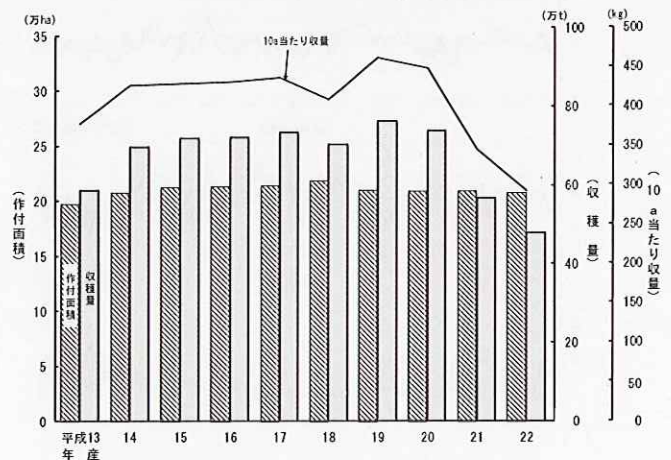
小麦の作付面積は20万6,900haで、前年産に比べて1,400ha（1％）減少した。

このうち、北海道は11万6,300haで、前年産並みとなった。

一方、都府県は9万600haで、関東・東山及び九州地域において、二条大麦への転換等があったことから前年産に比べて1,400ha（2％）減少した。

（表 2-1、2-2、図 2-2）

図 2-2 小麦の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）



(イ) 10 a 当たり収量

全国平均の10 a 当たり収量は276kgで、前年産に比べて15%下回った。

（表 2-1、2-2、図 2-2）

a 北 海 道

10 a 当たり収量は300kgで、前年産に比べて13%下回った。

これは、出穂期から収穫期までの高温や降雨の影響等による。

（表 2-1、2-2、図 2-3）

b 都府県

10 a 当たり収量は245kgで、前年産に比べて18%下回った。

これは、九州地域を中心とした生育期間における降雨の影響、春先の低温及び日照不足の影響等による。(表2-1、2-2、図2-4)

(ウ) 収穫量

収穫量は57万1,300 tで、前年産に比べて10万2,900 t (15%) 減少した。

このうち、北海道の収穫量は34万9,400tで、作付面積は前年産並みであったものの、10 a 当たり収量が前年産を13%下回ったため、前年産に比べて5万700 t (13%) 減少した。

一方、都府県の収穫量は22万1,900tで、作付面積が減少したことに加えて、10 a 当たり収量が前年産を18%下回ったため、前年産に比べて5万2,200t (19%) 減少した。

(表2-1、2-2、図2-2)

図2-3 平成22年産麦作期間の半旬別
気象経過 (帯広)

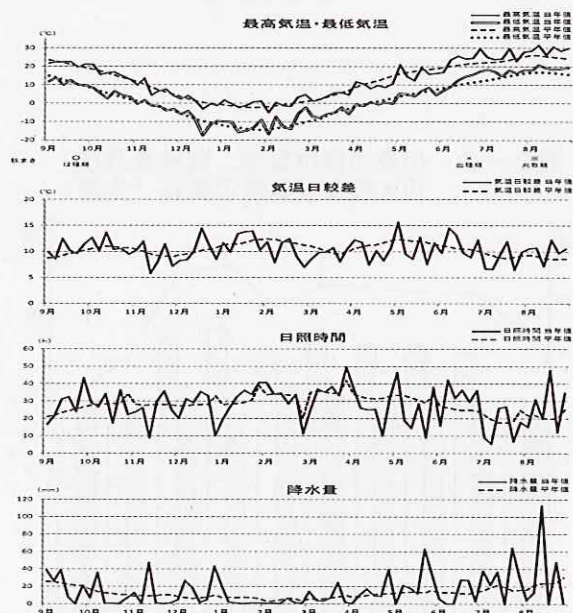
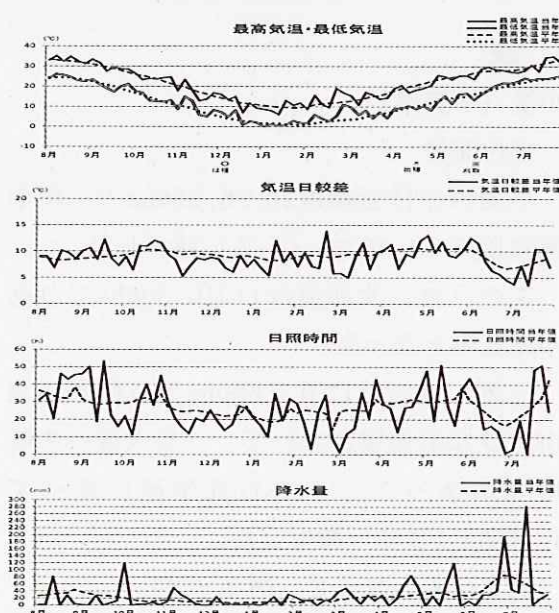


図2-4 平成22年産麦作期間の半旬別
気象経過 (佐賀)



イ 二条大麦（子実用）

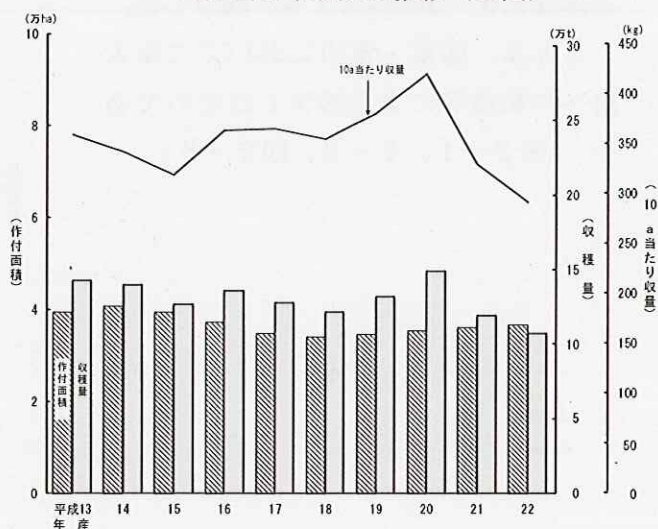
(ア) 作付面積

二条大麦の作付面積は3万6,600haで、前年産に比べて600ha（2%）増加した。

これは、栃木県等においてビール用等の作付け拡大や、九州地域において焼酎用の需要が多く、小麦からの転換等があったためである。

これを、北海道、都府県別にみると、北海道は2,110haで前年産に比べて40ha（2%）減少した。都府県は3万4,500haで前年産に比べて700ha（2%）増加した。（表2-1、2-2、図2-5）

図2-5 二条大麦の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



(イ) 10a 当たり収量

全国平均の10a 当たり収量は285kgで、前年産に比べて11%下回った。

これは、九州地域を中心とした生育期間における降雨の影響、春先の低温及び日照不足の影響等による。（表2-1、2-2、図2-5、2-6、2-7）

(ウ) 収穫量

収穫量は10万4,300tで、前年産に比べて1万1,500t（10%）減少した。

これは、作付面積が前年産に比べて増加したものの、10a 当たり収量が前年産を下回ったためである。（表2-1、2-2、図2-5）

図2-6 平成22年産麦作期間の半月別気象経過（福岡）

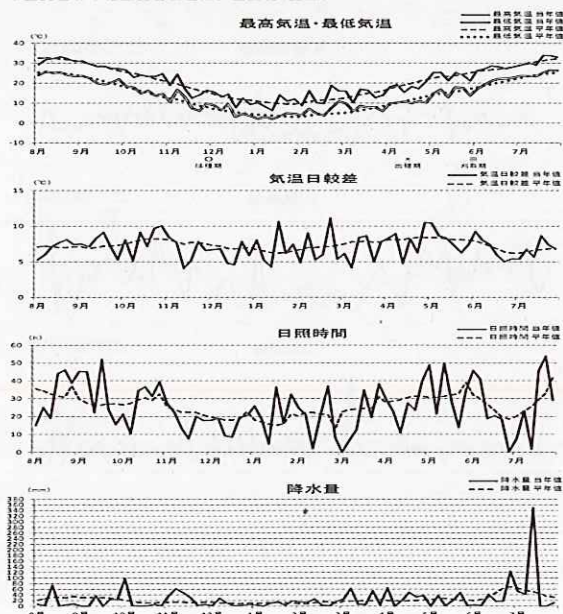
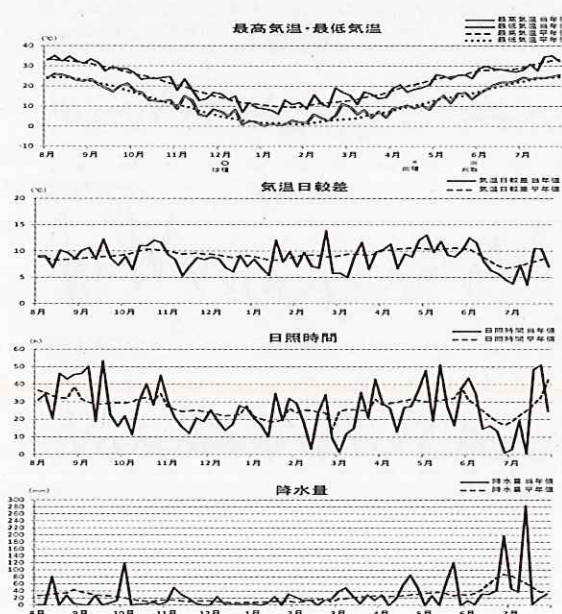


図2-7 平成22年産麦作期間の半月別気象経過（佐賀）



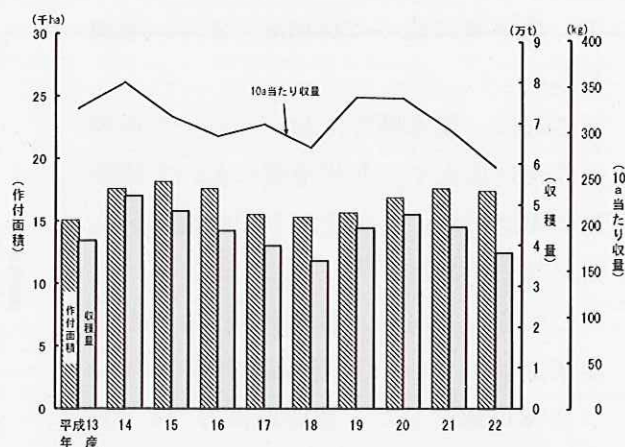
ウ 六条大麦（子実用）

(ア) 作付面積

六条大麦の作付面積は1万7,400haで、前年産に比べ200ha（1%）減少した。

これは、関東・東山において二条大麦への転換等により減少したためである。（表2-1、2-2、図2-8）

図2-8 六条大麦の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



(イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は257kgで、前年産に比べて13%下回った。

これは、北陸地域を中心とした4月下旬の低温及び5月中下旬の日照不足の影響等による。

（表2-1、2-2、図2-8、2-9、2-10）

(ウ) 収穫量

収穫量は4万4,800tで、前年産に比べて7,400t（14%）減少した。

これは、作付面積が減少したことに加え、10a 当たり収量が前年産を下回ったためである。

（表2-1、2-2、図2-8）

図2-9 平成22年産麦作期間の半旬別気象経過（富山）

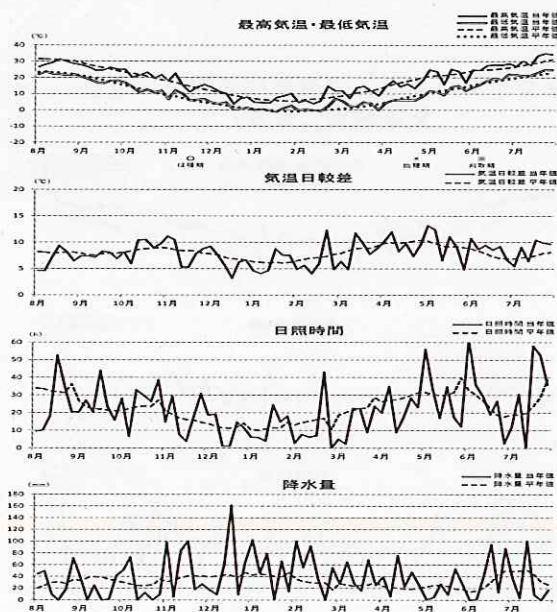
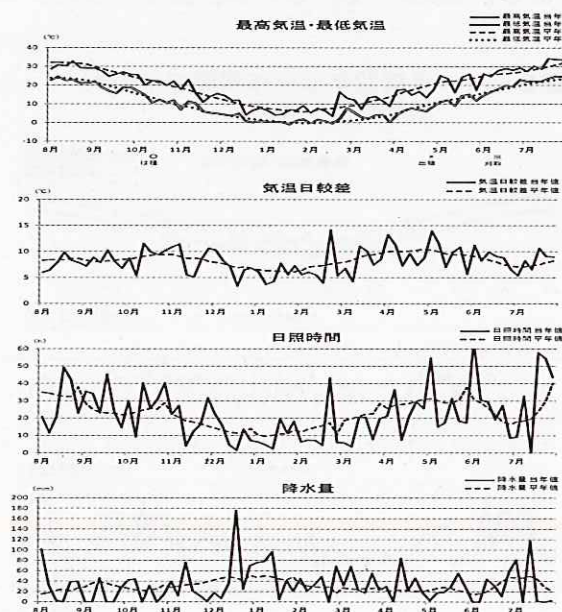


図2-10 平成22年産麦作期間の半旬別気象経過（福井）



エ はだか麦（子実用）

（ア） 作付面積

はだか麦の作付面積は4,720haで、前年産に比べて370ha（9％）増加した。

（表2-1、2-2、図2-11）

（イ） 10a 当たり収量

10a 当たり収量は250kgで、前年産に比べて3％下回った。

これは、主として大分県において、3月下旬から4月下旬の低温及び日照不足の影響等により生育が抑制されたこと等による。（表2-1、2-2、図2-11、2-12）

（ウ） 収穫量

収穫量は1万1,800tで、前年産に比べて600t（5％）増加した。

これは、10a 当たり収量が前年産を下回ったものの、作付面積が前年産をかなり上回ったためである。（表2-1、2-2、図2-11）

図2-11 はだか麦の作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）

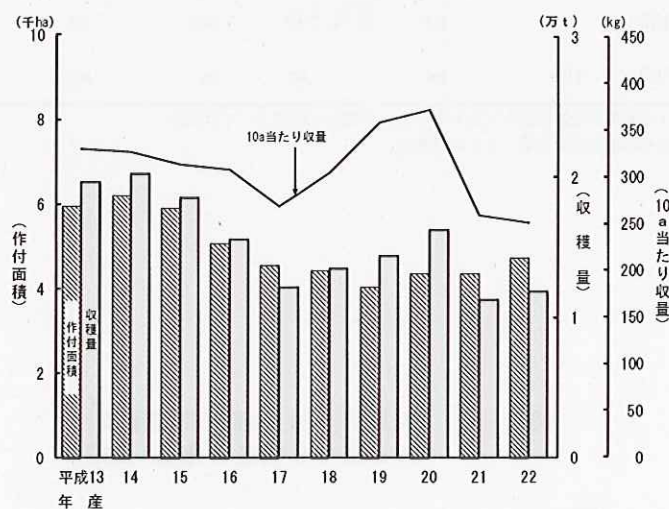
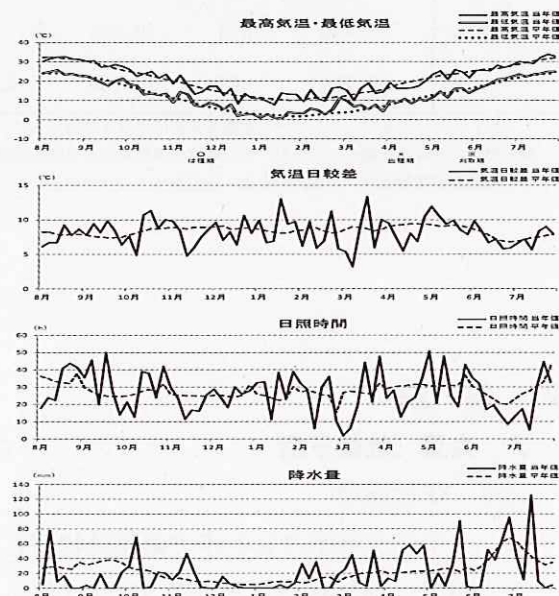


図2-12 平成22年産麦作期間の半月別気象経過（大分）



3 豆 類 ・ そ ば

(1) 要 旨

平成22年産の豆類（乾燥子実）の全国の収穫量は、大豆が22万2,500 t で前年産に比べて7,400 t （3 %）減少し、小豆が5万4,900 t で前年産に比べて2,100 t （4 %）増加した。いんげんは2万2,000 t で、前年産に比べて6,100 t （38%）増加した。らっかせいは1万6,200 t で、前年産に比べて4,100 t （20%）減少した。

また、平成22年産そばの収穫量は2万9,700 t であった。（表3）

表3 平成22年産豆類（乾燥子実）及びそばの作付面積、10 a 当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収	収 穫 量		10 a 当 たり 平均収量 対 比	10 a 当 たり 平均収量	
				対 差	対 比		対 比	対 差			対 比
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
大 豆	137,700	162	222,500	△ 7,700	95	103	△ 7,400	97	100	162	
小 豆	30,700	179	54,900	△ 1,000	97	107	2,100	104	90	200	
い ん げ ん	11,600	190	22,000	400	104	134	6,100	138	90	212	
ら っ か せ い	7,720	210	16,200	△ 150	98	81	△ 4,100	80	88	240	
そ ば	47,700	62	29,700	2,300	105	nc	nc	nc	nc	…	

注：1 小豆、いんげん及びらっかせいの収穫量調査は主産県調査であり、3年周期で全国調査を実施している。平成22年産については主産県を対象に調査を実施した。なお、全国値は主産県調査結果と主産県以外の推計値を合算したものである。

2 そばの収穫量調査は、平成22年産より全国調査となっている。

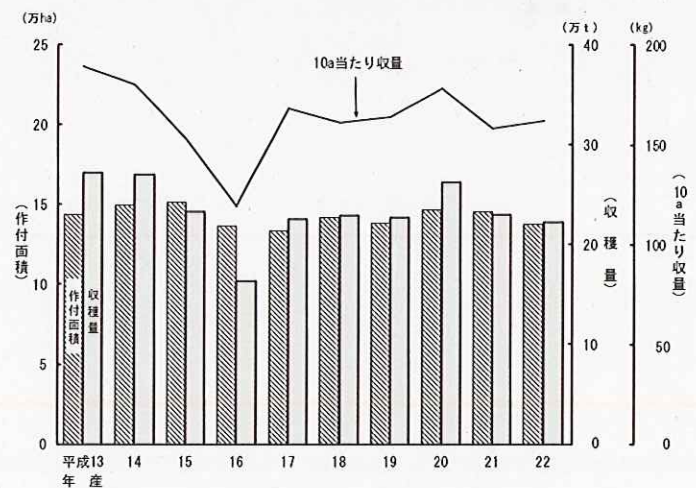
(2) 解 説

ア 大豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

平成22年産大豆の作付面積は13万7,700 haで、前年産に比べて7,700ha（5 %）減少した。（表3、図3-1）

図3-1 大豆の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移(全国)



(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は162kgで、前年産に比べて3 %上回った。

これは、北海道、東海等において前年産を上回ったためである。(表 3、図 3 - 1)

(ウ) 収穫量

収穫量は22万2,500 t で、前年産に比べて7,400 t (3 %) 減少した。

これは、10 a 当たり収量が前年産を上回ったものの、作付面積が前年産に比べて減少したためである。(表 3、図 3 - 1)

イ 小豆 (乾燥子実)

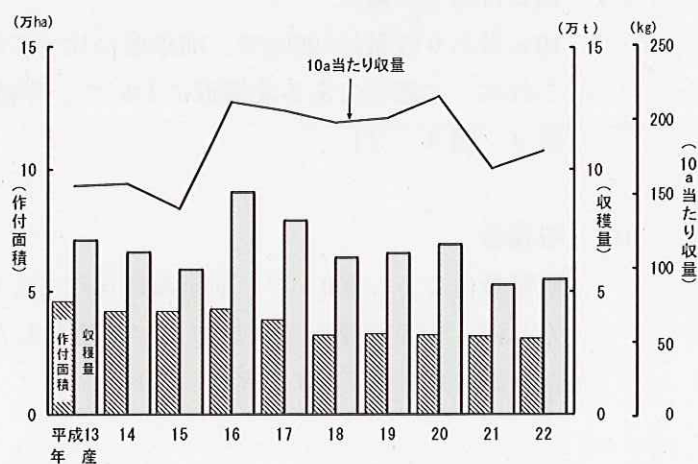
(ア) 作付面積

平成22年産小豆の作付面積は3万700haで、前年産に比べて1,000ha (3 %) 減少した。

このうち、全国の約8割を占める北海道の作付面積は2万3,200haで、前年産に比べて300ha (1 %) 減少した。

(表 3、図 3 - 2)

図 3 - 2 小豆の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移 (全国)



(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は179kgで、前年産に比べて7 %上回った。

これは、主産地である北海道等において前年産を上回ったためである。(表 3、図 3 - 2)

(ウ) 収穫量

収穫量は5万4,900 t で、前年産に比べて2,100 t (4 %) 増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したものの、10 a 当たり収量が前年産を上回ったためである。(表 3、図 3 - 2)

ウ いんげん（乾燥子実）

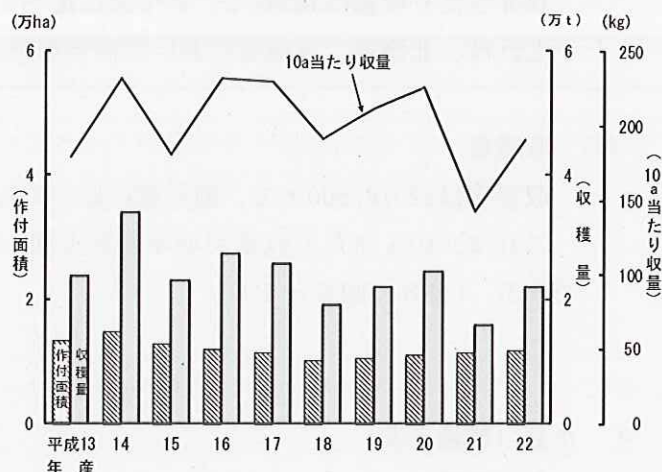
(ア) 作付面積

平成22年産いんげんの作付面積は1万1,600haで、前年産に比べて400ha（4%）増加した。

このうち、全国の約9割を占める北海道の作付面積は1万800haで、前年産に比べて600ha（6%）増加した。

（表3、図3-3）

図3-3 いんげんの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



(イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は190kgで、前年産に比べて34%上回った。

これは、主産地である北海道において、作柄が悪かった前年産を上回ったためである。

（表3、図3-3）

(ウ) 収穫量

収穫量は2万2,000tで、前年産に比べて6,100t（38%）増加した。

これは、作付面積が前年産に比べて増加したことに加えて、10a 当たり収量が前年産を上回ったためである。（表3、図3-3）

エ らっかせい（乾燥子実）

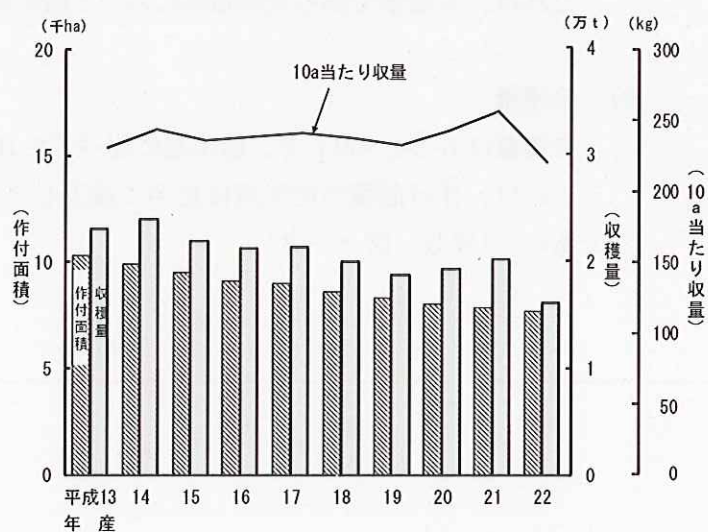
(ア) 作付面積

平成22年産らっかせいの作付面積は7,720haで、前年産に比べて150ha（2%）減少した。

このうち、全国の約7割を占める千葉県の実作付面積は5,690haで、前年産に比べて100ha（2%）減少した。

（表3、図3-4）

図3-4 らっかせいの作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）



(イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は210kgで、前年産に比べて19%下回った。

これは、茨城県及び千葉県において、7月下旬から8月下旬までの少雨の影響等により、空さやの発生が多かったこと等による。

（表3、図3-4）

(ウ) 収穫量

収穫量は1万6,200 tで、前年に比べて4,100 t (20%) 減少した。

これは、作付面積が前年産に比べて減少したことに加えて、10 a 当たり収量が前年産を下回ったためである。(表3、図3-4)

オ そば

(ア) 作付面積

平成22年産そばの作付面積は4万7,700haで、前年産に比べて2,300ha (5%) 増加した。

これは、関東・東山、北陸、九州等において戸別所得補償モデル対策の開始により作付けが増加したこと等による。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は62kgであった。

このうち、北海道の10 a 当たり収量は72kgで、作柄の悪かった前年産に比べて53%上回ったものの、10 a 当たり平均収量を4%下回った。これは、開花期から収穫期までの高温の影響により登熟期間が短縮され、未熟粒が多く発生したこと等による。(表3)

(ウ) 収穫量

収穫量は2万9,700 tであった。(表3)